第5編

地域医療連携の推進（平成27年～平成31年）

第1章　移転開院

移転準備の組織づくり

平成26年6月、市立病院は移転に係る院内の検討組織として、患者移送計画の作成や移送リハーサルを実施するための患者搬送部門、物品搬送計画を作成するための物品移転部門、各部門間の調整を行うための総合調整部門を立ち上げた。総合調整の責任者は、秋野博臣事務局長が務め、各診療科や看護部をはじめ、薬剤科、放射線技術科、臨床検査技術科、リハビリテーション技術科の医療技術部門、事務局の各担当者が集まり、移転にあたっての課題を協議し、情報共有を図った。

また、同年9月には、患者移送や備品類の移設を安全かつ円滑に実施すること、新病院移転に際し、必要となる診療制限に関することなどを協議、調整するために、新病院移転に係る関係機関連絡調整会議を設置した。委員は、県、県・市医師会、中央警察署、市保健所、消防局、交通局の関係者で構成した。

移転直前の27年4月には、病院移転に係る救急医療の対応について、県・市医師会や鹿児島大学病院、県関係課、関係病院に対し、小児救急医療や周産期医療、その他の救急医療、ドクターヘリなどの市立病院の救急医療に係る診療体制（受け入れ制限）等について説明し、理解を得るとともに協力を依頼した。

新病院が完成

平成27年3月、鹿児島市上荒田町のＪＴ跡地に、24年9月から建設していた新市立病院（坪内博仁院長）が、2年7カ月に及ぶ工事期間を経て完成した。敷地面積が旧病院の約3倍。地上8階建てで、屋上のヘリポートに県ドクターヘリが離着陸する。総病床数５７４床、駐車場は６５０台収容。機能面でも成育医療、救命救急、がんの3医療を中心に強化・充実した。総事業費約３２０億円。

移転は、入院患者１８５人（想定）を救急車やマイクロバスで移す。外来は4月25日から5月10日まで休診（再診予約患者は7日から診療）。救急外来は、4月30日午前0時から5月2日午前8時まで停止する。ドクターヘリは、4月30日と5月1日に運休。米盛病院救急ヘリが代替出動する。平日の日中稼働するドクターカーは、4月29日から5月6日まで運用を停止する―とのスケジュールを立てた。

市立病院総務課の児玉哲朗課長は「地元住民をはじめ関係者のご協力を得て、無事に完成できた。移転は入院患者の症状に影響が出ないように安全、円滑に行いたい。関係機関の協力をいただきながら万全の態勢で臨みたい」と話した。

高度機器を大幅刷新

「新しい酒は新しい皮袋に盛れ」の諺（ことわざ）が思い浮かぶ―。上荒田町への移転開院を目前に、市立病院は平成27年3月、新病院にふさわしい高度医療機器を大幅に刷新し、新たな門出に備えた。主なものは次の通りである。

▽磁気共鳴画像診断装置（更新　27年3月）

磁気と電波を利用して人体の断層画像を撮影する磁場強度1・5TのMRI装置で、新生児や小児等に対してもMRI検査が可能になる。購入費1億6630万円。

▽全身用X線CT装置（増設　同）

迅速さと精度の両面を兼ね備えた高性能のX線CT装置で、さまざまな病変の病巣部位や範囲の特定など、診断と治療に必要不可欠な検査の効率性が向上する。同2億4610万円。

▽X線CT組み合わせ型血管造影装置（新規　同）

CT装置と血管造影装置が一体となった装置で、CT検査後にそのまま血管内手術を行うことが可能となり、肝細胞がん治療等の効果が向上するとともに、救急医療の充実が図られる。同1億8482万円。

▽血管造影装置（新規・更新　同）

血管に細いカテーテルを挿入しての血管内治療や、がん細胞への直接の薬剤注入などの効率的な治療

が可能となる。同3億5210万円。

▽リニアック治療装置（更新　同）

高エネルギーX線や電子線などの放射線を照射して、がんなどの治療を行うもので、高精度放射線治療が可能となる。同4億4096万円。

このほか、産婦人科の「超音波画像診断装置」（増設・2995万円）、中央手術部の「手術画像配信システム」（新規・1億5083万円）「麻酔記録システム」（新規・7776万円）「人工心肺装置」（新規・4271万円）「手術用ナビゲーションユニット」（更新・5886万円）、泌尿器科の「膀胱鏡検査HDシステム」（増設・1255万円）、心臓血管外科の「内視鏡システム」（新規・1188万円）、病理診断科の「ホルムアルデヒド対策システム」（新規・1779万円）、中央材料室の「RO水製造装置」（新規・1512万円）等が、集約的に整備され、診察精度の向上、検査機能や診療機能のさらなる充実・強化が図られた。

物品移送、慈愛像も

病院本棟の竣工後の27年2月末以降、急ピッチで様々な物品の移送が開始された。3月には新規に購入したMRIやIVR―CT等の医療機器が搬入された。CTや血管造影撮影装置等の移設対象の医療機器等は、外来診察の休診等のタイミングを計りながら移転前後を中心に計画的に移送された。総合案内や外

来待合等のパブリックスペースに配置するソファ等の新規物品は竣工後順次搬入され、移設物品は業務のタイミングに合わせ、順次移送された。

昭和58年3月29日に加治屋町の市立病院敷地内に建立された慈愛像は、建立当時のように金箔張りにするため修復したうえ、新病院の正面玄関前に移設した。修復にあたっては、慈愛像のモチーフである「慈愛、幸せ、安らぎ、生命」などのイメージを損なうことなく慎重に進められた。慈愛像の台座は、旧病院の台座に使われていた石成石（マンナリイシ）や黒御影石を取り外し、これらの石材を用いて、別途に工事を行い設置した。

加治屋町の旧病院「いこいの森」に生育する樹木のうち、生育状態の良いクスノキ、ケヤキ、モッコク（上高原元院長の記念樹を含む）、ヤブツバキ、サザンカを新病院へ移植した。対象の樹木は、平成26年6月から着手し、移植までの間、剪定や樹木の根回し、月2回程度の水遣りを行い、新病院敷地整備の完了に合わせ、西側電車通り側に移植した。また同時期に鹿児島県造園事業協同組合からサルスベリ1本を寄贈され、正面玄関近くに植樹した。

また、5月の新病院移転後、廃棄対象となった医療機器や什器、機密文書・パソコン等の処分に着手した。医療機器と什器の一部は業者に売却し、その他の物品は廃棄業者に依頼して処分した。建物に固定された医療機器や厨房機器の解体には日数を要したが、解体工事着工前までの同年9月までに廃棄処分が完了した。

院内保育所「こあらっこ」開所

新病院内に付属して開設する「保育所」が、平成27年2月末までに完成し、病院の移転開院に先駆け4月4日に坪内博仁院長らが出席して「開所・入園式」が行われた。

院内保育所については、これまで設置の要望が市議会などで出されていたが、スペース確保等に課題があった。新しい保育所は、エネルギーセンターの東側約880平方㍍の敷地に建設した。延べ床面積約520平方㍍の1階が保育所で、定員は40人とした。運営委託会社は、「株式会社アイグラン」（本社・広島市）に決まり、園名は「こあらっこ保育園」になった。保育年齢は、0歳児（生後8週間以上）～6歳（小学校就学前まで）。「月極保育」「終夜保育」「延長保育」など保育形態ごとに料金が設定された。

同年9月の市議会で、保育所の利用状況について市立病院は「勤務する医師、看護師等のスタッフを対象とし、7月には定員40人に対して23人が利用している。夜勤勤務者が利用できる終夜保育は月に5回程度あり、7月は延べ11人の利用があった。保育児童数は、月ごとに増加してきているので、今後も利用を希望する職員などのニーズに応えていきたい」と説明した。

院内保育所の開園式

新病院の完成祝う

平成27年4月17日、新市立病院の完成記念式典が院内であり、医療や行政の関係者ら約３５０人が出席し、森博幸市長らのテープカットで完成を祝った。

森市長は、新病院について「地域の医療機関と連携を図るなかで、健やかに暮らせる安全で安心なまちづくりの実現と、60万市民の大きな信頼と安心につながると確信している」とあいさつ、建設工事の関係者らに感謝状を贈った。出席者を対象に見学会も開催。坪内博仁院長は「ヘリポートを設置し、急患へ迅速に対応できるようにした。周産期も日本最高級の設備を備え、がん治療も最先端の放射線治療機器などを導入した。医療レベルを高くして患者に応えるため、職員のチームワークを大事にし、より良い医療を提供したい」と語った。４月１日現在の医師、看護師、事務職などの職員定数は９０７人。移転開院に伴い、前年度から70人の定数増となる。減価償却のため当面は赤字が続く見込みで、平成33年度頃の黒字化を目指すとされた。

テープカットで完成を祝う

コンセプトは「光と緑あふれる」

完成した新病院の建設コンセプトは「明るく光と緑あふれる病院」。また基幹災害拠点病院として免震構造を採用し、屋上ヘリポートを設置したほか、万一の浸水に備え、地下階は設けていない。同日行われた出席者見学会でも「光と緑」に注目が集まった。

外来や救命救急センター、放射線治療部門等が集まる1階には、2階まで吹き抜けのホスピタルストリートや光庭を設置し、明るさを確保した。光庭を望むフロアの一角に「図書コーナー」を開設し、患者に憩いの場を提供する。2階には外来や検査部門、3階は中央手術室11室、ＩＣＵ（集中治療室）16床、救急病棟24床等を整備。救命救急センターとＩＣＵは、救急エレベーターで接続した。4階は成育医療センターとして、産科と新生児部門で構成。手術対応の分娩室を導入、ＮＩＣＵ（新生児集中治療室）も36床確保する。

5階は小児科部門ＳＣＵ（脳卒中集中治療室）3床を設置した脳神経外科病棟とリハビリテーション部門を隣接させ、脳血管疾患リハビリ機能の充実を図った。6～8階は一般病棟としてワンフロア2看護単位で構成、病棟には外光を十分取り込んだ。スタッフステーションと病室を近づけ動線を短くして、迅速できめ細かな看護提供と業務の効率化を図っている。多床室は4床として個室率は約20％となった。

環境への配慮として、病院本棟に太陽光発電設備を設置。敷地内に整備したエネルギーセンター屋上には太陽熱集熱パネル（集熱面積1・94㎡）60枚を設置した。本棟屋上のほかエネルギーセンターと駐輪場

の壁面を緑化して、緑あふれる病院を醸し出している。

「上荒田の杜公園」も

一方、市が新市立病院の南隣に整備していた「上荒田の杜公園」でも同日、開園の式典が行われた。公園は広さ1・1㌶、災害避難用を兼ねた4200平方㍍の芝生広場や1周300㍍の遊歩路、遊具6台を備える。屋根付きの休憩所2カ所、背付きベンチなど25台を設置。アコウなど高木88本、低木71本を植栽した。市街地の緑の回廊づくりを進める事業の一環だ。用地費12億7000万円、整備費2億1000万円。森市長は「市立病院の患者さんらが気軽に散策できる。多くの人々に利用してほしい」と訴えた。

患者移送のリハーサル

平成27年4月27日、移転のための患者移送リハーサルを始めた。医師や看護師ら約70人が参加。職員を患者に見立て、ベッドからストレッチャーへの乗せ替えや救急車での搬送をして、役割や手順を確認した。

27日は成人の患者の移送を実演。重症患者や一般患者役ら19人を救急車3台とマイクロバス1台に乗せ、加治屋町の旧病院から上荒田町の新病院まで移送した。平原一穂副院長は「おおむねスケジュール通

りにできた。移送中に患者の状態をチェックする手順など、見つかった課題を整理して安全に移れるようにしたい」と話した。28日は新生児の移送に向け、保育器などのバスへの積み込みや搬送のリハーサルを行った。5月1日の本番は、新生児を含めて患者140～185人の移送（2コース）を想定した。

加治屋町で閉院式

平成27年4月30日、上荒田町への移転を翌日に控える中、加治屋町の市立病院学術講堂で閉院式があった。森博幸市長のほか医師や看護師ら職員約300人が出席。加治屋町での約67年の歴史に感謝し、「新病院でまた第一歩を踏み出そう」と決意を新たにした。

坪内博仁院長が「市立病院が重要な役割を担ってこられたのは、職員をはじめ地域の皆様、多くの方々のおかげ」と感謝。昭和52年から働いてきた田上みや子看護部長は「市民のニーズに応えようと、少しずつ機能や病床、職員を増やしてきた病院です。新たな事業に知恵を出し合い、乗り切ろうとする気風がずっと続くことを祈りたい」と話した。坪内院長が、食堂や売店を営業してきた業者に感謝状を贈呈。最後に全員で「蛍の光」を合唱して加治屋町での歴史に幕を閉じた。

ミッションコンプリート

平成27年5月1日、旧病院から新病院への引っ越しを無事果たしたが、このなかで「前代未聞」となったのが、新生児の患者移送だった。担当の新生児科・石原千詠科長に与えられた使命は「新生児の乗った保育器と人工呼吸器、生体モニターを1ユニットとし、ユニット丸ごと一緒に搬送できる手段を考えること」だった。トランスカプセルを使う通常の新生児移送と違い、ユニット丸ごとの積載は、新生児搬送用の「こうのとり号」をはじめ一般救急車では不可能。当初は自衛隊の輸送トラックの利用も検討された。

そんなとき、総務課職員が見つけたのが「車いす1台を乗せる交通局のバス」。しかし、巻き尺を持っ

て調べるとこれも無理。頭を抱えていると「車いす2台仕様のバス」もあることが分かり、交渉の末、2台準備するとの連絡をもらい、交通局の協力を得た。広い空間を確保するため、車内の座席や手すりなど外せるものは全部外し、当日は「赤ちゃん搬送中」の電光掲示をすることまで決まった。警察との交渉に臨んでも、新生児搬送の概要を説明すると「出来る限りのことをしましょう」と快諾された。

当日搬送されたのは、人工呼吸器管理19例を含む44例の新生児（１０００㌘未満７例、最小体重４５６㌘、最小日齢1、最小修正24週6日）。パトカーによる先導・後方警戒のほか、搬送ルートの13基の信号機と交差点に警察官が配置され、信号機の切り替えと交通整理のもと、ノンストップで市営バス2台による搬送を無事終えた。搬送に携わった人も市立病院18人、ＯＢ6人の医師24人、新生児センター看護師１１９人のほか、普段から新生児医療にかかわる病院職員、中央警察署員、交通局職員など総勢２００人を超えた。

無事、任務完遂（ミッションコンプリート）した石原科長は、後日の県外会合で新生児搬送について「公立病院だから」「鹿児島だから」など、僻（ひが）みに近い声を掛けられた。だが、同科長は「新生児センター37年の歴史の重み。そして何より薩摩の人の愛情深い優しい人柄が大きい。鹿児島市立病院でしかできない前代未聞の新生児移送だった」と振り返った。

新病院が本格オープン

平成27年5月11日、上荒田町の新市立病院で再診予約患者の診察（7日）に続き、一般外来の診療がスタートした。初診患者は通常の2倍以上となる約２３０人が来院。再診予約を含め、約７００人の患者が診察を受けた。

初診患者が待つ総合受付の約50席は、受付開始の午前8時半を前に、ほぼ埋まった。一般外来は加治屋町の旧病院で4月24日に終了後、16日ぶりの再開だ。窓口は一時行列ができたが、職員の丁寧な応対でスムーズに流れた。旧病院の3倍の６５０台収容の駐車場にも車が順調に入場。駐車待ちの車が路上に並ぶ光景は見られず、午前10時半に7割ほど埋まったのがピークだった。

磯江剛医事情報課長は「初診患者が多かったのは、市民や県民の関心が高いことの表れかもしれない。大きな混乱はなかった」と話した。